

特別展「深宇宙展～人類はどこへ向かうのか」の開催

特別展「深宇宙展」製作チーム

事例の概要

特別展「深宇宙展～人類はどこへ向かうのか」は、2025年7月12日～9月28日に日本科学未来館、2025年10月18日～2026年1月18日に豊田市博物館で開催した、人類の新たな宇宙への挑戦を体感する日本最大級の宇宙展である。JAXA・国立天文台・東京大学などの宇宙研究機関や企業と連携し、「いまの日本の宇宙」を一堂で紹介した。世界初公開の「有人圧ローバ」実物大模型や宇宙から帰還した「ソユーズ宇宙船」実機、小惑星イトカワ・リュウグウの本物のサンプルなどを展示し、約22万人が来場した。東京会場の来場者アンケートでは、満足度96.7%、10～20代が回答者の48%を占め、若い世代の人材育成や宇宙開発に対する理解促進に大きく貢献した。



有人圧ローバ(実物大模型)

受賞のポイント(選考委員講評)

有人圧ローバの実物大模型をはじめとした各種宇宙機・ロケット等の展示を行い、高い体験価値を提供した。多数の来場者から高い評価を受けたこの展示は、広く産学官による宇宙開発の成果を還元・周知し、科学技術の振興に貢献したと高く評価できる。

深宇宙に関して多くの人々に興味を喚起し、科学的な情報を広く伝えたという点について高く評価できる。

具体的成果等

1. 宇宙開発利用の新たな領域創造への貢献

深宇宙展では、日本が開発を進める有人月面探査車「有人圧ローバ」の実物大模型をJAXA等の関係機関と連携し、世界で初めて製作・公開した。一般の来場者に加え、国内外の研究者・技術者が多く視察し、研究と社会をつなぐ場となった。さらに「H3ロケット」のフェアリング実物大模型を製作し、来場者に実際の大きさを体感いただいた。また、東京大学と連携して「月面誘電率計測器(LDA)」模型を製作し、現役宇宙飛行士の紹介パネルや映像展示とともに「アルテミス計画」の最前線を伝えた。宇宙から帰還した「ソユーズ宇宙船」(実機)や、「さわれる本物のロケット部品」を展示し、「宇宙を実感」できる体験は大きな反響を呼んだ。

一般社団法人SPACETIDEや一般社団法人宇宙旅客輸送推進協議会と連携し、民間企業の展示を加えて民間の宇宙開発を紹介した。これにより若い世代が「自分の将来に宇宙を加える」きっかけを得ることができた。こうした多分野横断的な取組は従来にない挑戦であり、宇宙開発利用の新たな領域創出に大きく貢献した。

2. 宇宙開発利用市場の拡大への貢献

深宇宙展には約22万人が来場し、「宇宙関連の仕事を知り、将来の職業の選択肢に取り入れたい」といった声が多く寄せられた。東京会場の来場者アンケートでは10～20代が回答者全体の48%を占め、将来の宇宙開発・探査の担い手層に直接アプローチできた点は大きな成果である。展示では、小型衛星、観測サービス、ロケット開発など民間宇宙産業の取組を紹介し、市場の現状と将来像を分かりやすく提示した。SNSや記事の発信を通じて、来場者以外にも宇宙産業への関心が広がり、市場拡大に向けた社会的基盤を築いた。

3. 経済・社会の高度化への貢献

深宇宙展は、科学・教育・文化を横断する総合展として開催された。運用中の先進レーダ衛星「だいち4号」(ALOS-4)や準天頂衛星システム「みちびき」などの模型の展示、天気予報やスマートフォン、カーナビ、農業、災害時における活用事例を紹介する解説パネルを通じて、社会・生活にとって「宇宙を身近に感じる」機会を提供した。多数のメディアが深宇宙展を通じて宇宙開発を紹介し、社会全体の宇宙リテラシー向上に貢献した。

4. 技術への貢献

「有人圧ローバ」実物大模型は世界初公開となり、日本の技術力を体感してもらうとともに、研究機関や技術者にとって新たな価値を生んだ。天文分野では、「すばる望遠鏡」や「アルマ望遠鏡」、X線分光撮像衛星「XRISM」などの成果や最新ミッションを紹介。映像展示「火星ツアー」では、最新データをもとに映像と音で火星の特異な環境やジェゼロクレーターを分かりやすく解説した。これらは、展覧会やメディアを通して「研究成果を社会に還元する」形を提示し、技術の社会的価値を広く認知させた点で大きな意義がある。

5. 国民理解の増進・人材育成への貢献

全ての解説パネルにふりがなと英訳を付すとともに、音声ガイドや子ども向けクイズパネルを用意し、幅広い世代が楽しみながら学べるよう工夫した。来場者の声では「宇宙を学べて感動した」「宇宙の話題を理解できるようになった」という意見が多く寄せられた。宇宙を身近で挑戦できる分野として提示し、次世代人材育成と理解促進の双方を力強く後押しした。

